

昭和二十八年十月五日 初版印刷
昭和二十八年十月十日 初版發行

昭和文學全集24
昭和戲曲集

代表
著作者 久保 榮

發行者 角川源義

印刷者 中内佐光

東京都千代田區飯田町一ノ三



發行所

東京都千代田區
富士見町二ノ七

角川書店
かどかはしよてん

振替東京一九五二〇八
電話九段〇二二一〇二四

本文紙 本州製紙株式會社
クロス 日本クロス工業株式會社
印刷所 曉印刷株式會社
製本所 宮田製本所

昭和戲曲集

昭和文學全集
角川書店版

目次

卷頭寫眞

筆蹟

火山灰地

炎の人

北東の風

初戀

若き啄木

かどで

おふくろ

夕鶴

蛙昇天

かういふ戯曲は書きたくない (二七) ゴオホの三本の柱 (二七)

作家と感動 (三六) 「初戀」と日本の家族制度 (四七) 處女作が

出来るまで (三七) 民話劇 (四〇 三六)

解説

年譜

久保 榮

五

三好十郎

二九

久板榮二郎

一五

村山知義

三七

藤森成吉

二九

森本 薫

二五

田中千禾夫

三一

木下順二

三九

木下順二

三四

戸板康二

三九

四〇

久保
榮集

山からおろした切木
の束に／つくる存心と
生きた心とをこめて
／今も明日も焼く
炭焼窯
久保榮

火山灰地

故・小山内薫先生に捧ぐ

この戯曲は、先生の遺志を

その現在形に於いてではなく

その未來形に於いて受け継がう

とした

才能まづしい

一門下生の筆になるものです。

時

一九三〇年代（或る歳末から、翌年の收穫期へかけて）

所

北日本（或る支廳管内の市と農村）

第一部 4 幕

1

暗いまゝに、前奏曲。

タイトルが、照らし出される——戯曲の題名

つぎのタイトルが、照らし出される。——上演する劇團の名とマーク。

曲のテーマ的旋律の導入とともに、朗讀者の言葉が繰り交へられる。

朗 読

——先住民族の原語を翻譯すると——

「河の岐れたところ」を意味するこの市は

——日本第六位の大河とその支流とが

——眞二つに裂けた燕の尾のやうに——市の一

方の尖端で合流する——鋭角的な懷ろに抱

きかへられてゐる。

日本の北の涯ての農業都市——どこより

も雪融けが遅く——どこよりも霜の早く來

る平原のなかに——ちやうど皺だらけの農

民の掌にのつた——一粒の穀物のやうに

小さな市。

だが——市をめぐる二十萬町歩の耕地か

ら——馬車とレールで運ばれて來る、豈は

——和蘭産と世界の賣れゆきを争ひながら

——この雜穀市場から——海を超えて積

み出される。——はるかに臺灣と呼應して

——甜菜から砂糖をつくる製糖會社の輸送

路には——日に何千となく——土のまゝの

原料の肌が——鐵の熊手で洗し込まれ洗ひ

出される。——製麻會社の製線所の——ロー

ーアとムーラン機のフアンをくぐつて

——南の工業地へ送られる亞麻の纖維は

——やがて飛行機の翼となり——甲板を覆

ふズツクに變る。

間。——音楽。

朗 読 ——停車場を起點とする市のメイン・

ストリートが——燕の尾の一方の流れと交

よるところに——一つの橋が——市と農村

との交通に、楔を打つてゐる。

河向うは——おなじく先住民族の言葉で

「髪の毛」と名づけられ——風に吹きなび

く黒髪のやうに川筋の亂れた——この平原

第一の耕作面積をもつ村である。

冷害——飢饉——凶作——水害——自然

と人間とがつくり出す脅威にさらされなが
ら——しかし——土に棲む人びとは——荒
れ地の石の下から芽生える——名なし草
のやうに生きてゆく。
劇は——この市と——この農村とを中心
に——そして今——二つを繋ぐ橋の袂に
——春待つ市の立つ頃から——翌年の收
穫期へ……

やがて、前奏曲の最後の部分は、疾走する汽車
のひびきの表現に移りかはり、さらにそれがリ
アルな車輪の振音に移つてゆく間に……

タイトルが照らし出される……

1 歳の市

轟然と近づく車輪の軋り。長く尾をひく、する
どい汽笛。タイトルの溶暗と、舞臺の溶明。

三方を廊でかこひ、觀客席へむかつて、屋根の
裏の傾斜をみせた丸太組の歳の市の小屋をゆ
るがせて、列車は、市中へむかつて走りすぎて
ゆく。

舞臺の一方の端、雪の堆高いコンクリートの堤

河邊 ふう！ つくそう！

は、列車を見送りながら……

まつえ 誰だべ、あれ？

車のついた踏切の欄が舞臺の端に動いて来て、よどんでゐた人や馬や櫓のしと塊りが、動き出すのはひ。鈴の音、蹄の音、鞭の音……

——バイキ！ バイキ、バイキ！
と馬を叱る荒つぽい聲。笑ひ聲。話し聲。

歳の市といつても、この雪國は松に乏しく、たから門松に依り出すものは、クリスマス・トリイを聯想させる桜松である。また、この地方でつくる牛乳^{ゴウヂョウ}や輪かざりも、露のやうなふくよかな感じをもたない、いやに青つぽい染料で染められた昔である。店さきの荒板の壁のうへには、無器用な土燒の海老やおかめの面、^{カマエ}模のかはりにする、かじかんた蜜柑などが並ぶ。道はたの雪の小山のゆるりに押したどろ、楊のいかつい枝ぶりの蘭玉は、亞砒酸のやうに光る根雪の照りかへしに、いやしい紅や緑を、ふしぎに美しいものに見せ、軒に立つた蛇の足や鹽蛙は、障のやうに凍つてゐるとすれば、すべてはこの歳の市が、場末の細民と橋をわたつて買ひに来る貧しい農民たちを相手の營みたといふことを、ひと眼で知らせてくれる。

小屋がけの一家族——村の中農・船津秀松、その妻いし、その娘まつえの三人は、買ひ手の求めるまゝに長い棧で高いところに吊したものを下ろしたり、桜松の切り枝の荒縄をほどいて抽

へたり、寒さに手ががじかんで来ると、店の奥の、鐵板をとほすほどに赤々と薪の燃えたストーヴのそばに、歸つたり、そして今は、北國日報の眞真班に、店さきのまはゆい雪晴れの朝のなかへ引き出されたところである。

まつえ (ふりかへつて) お父う……

河邊 (堤防のうへから) 娘さん——ちよつくら、こつち向いて。

まつえ (言はれるとほりに) かうかね。(そのまゝ顔を動かさず) ……見なかつたかい？ いま汽車の窓あけて、こつちさ向いて、わあーつて吐鳴つた人あんだよ。

秀松 酔つぱらひだべ——けふだら、滿洲移民の見送りでな、泣いたり笑つたりだちふもん、停車場は。

河邊 (レンズの位置を變へながら) うまくねいなあ。雪のハレーション強すぎて、顔もなんも、まつ黒けに撮さるべさ。

人びとの笑ひこゑ。

小屋の面してゐる道路は、僅かな一部をプロセニアムのなかに見せて、あとは觀客席のうへを左右に貫いてゐる心もち。その往來の向ひ側から、囁し立てる若い男たちのこゑ。

まつえ

——えいど、えいど。

——そつたら氣どるもんでねいど。

まつえ (その方角をみて) ちえつ、木工場のあんちやん達だよ。(大聲で) 見てるんでないよう。早く、倉庫さトロツコ押してきなさあいつて。

また、わあーつと囁す聲。雪玉、一つ二つ降んで来る。

まつえ 憎つくりしいねえ。(大聲で) ちよつと。元氣あつたら、こささ出て來なさあい。わしと抱かさつて撮すべえ。

いし 構ふんでねいつて、まつえ。

河邊といつしよに、歳末風景の記事をとり來たおなじ支局の三宅鍾也が、いま買ひものを風呂敷につつまゐる關爲吉のそばへ寄つて……

三宅 あなたも、はひつて呉れませんか？

關 かんべんしれや。

三宅 笑ひながら買つてられるところを——

(堤防をふり向いて) 撮すんだらう？

關 常談たべ——笑ひがはなんだ、新聞さ出してみれつて——ひつぱたかれつから。

いし (吊した籠から鏡をわたして) へい、お剃り。

——いふこと違ふもんねえ、札たまつてそねまれている人は。

三宅 さう言はずに——どうか……

(往來の一方をみて) かうなるちふと、早く

バス來ねいもんな。

まつえ 來るわけねいべさ。いま通つた下りと、驛前で連絡すんでねいの。

三宅 (堤防) どうする？

河邊 無しでえくべ、無しで。

いし 關さんもなあ。この雪で、大橋のさきの鈴蘭橋、反つてな。バスだら、なんぼタイヤさ鎖巻いたつても、すべり落ちてしまつたもんなあ。

關 (眞に受けて) ほんとかい?

いし (笑ひ出した真顔で) せつかく銀行さ札を
さめてな、關さんもゆつくら寫眞でも撮し
てえけば、命びろひするとこだつたになあ
——ちふもんだべさ。

關 糞う。こきやがつたな。——(秀松に)
船津つあん、待たしてけれな、バス来るま
で。

秀松 えいつて、えいつて。

關、ストーヴのそばへ行く。

まつえ (往來の一方に誰かを見つけて、堤防のはうへ、寫
眞機をかくせと合圖する。そして) 庄作さあん。(遠
い返事 來なさい、ちよつとう。(手招きする))

一見して、農民が季節労働に出たと分かる服装
の逸見庄作が、店さきへ近づく。

まつえ なあして、こゝら、ごろついてんの?

庄作 用かね?

まつえ あゝ、甜菜の流し込みさ出てたんだ

ね、あんた。

庄作 きので終へたども、あの雪でな……

まつえ 手え出しなさい、庄作さん。

庄作 なんだ?

まつえ えいもん上げるから。——さあ。

庄作 何んだちふに? (手を出しかける)

河邊 (堤防のうへから、見すましてシャッターを切る)

O.K

庄作のまはり、どつと上がる笑ひこゑ。向ひ
側からも、手を打って囃し立てる。

——うめい、うめい。

——姐っこ、智慧あるど。

庄作、けけんさうに見まはす。

まつえ (笑ひこけて) えいんでないの、庄作さ
んなら、まだ知らねんだよ、あつは、は、
は、は……

河邊 頼む。(寫眞機を三宅に渡し、とび下り)

いし 明日の新聞、借りて見なさへ、今のえ
いとこ撮さつてゐるから、は、は、は……

秀松 お買ひ物の寫眞載るだら、まづ大臣級
だもん、ふ、ふ、ふん……

三宅 (堤防の下ところで、河邊と立ち話をしてゐる)

……一旦歸つて、驛まで出なほす時間なん
かないよ。

河邊 だめだつてや。支局長が……(話しつづ
ける)

秀松 (むつとして歩きかけた庄作に) ついでに、買
はねいかい。製糖會社の仕事じめいだら、

たんまり持つてゐるべ?

いし な、負けとくで……

まつえ 買つて行きなさいつて。新聞の寫眞
が、嘘になるんでないの。

庄作 (答へずに、行きかける)

(ストーヴのそばから) 逸見。

庄作 (ふりかへる)

屈けてよこすちうて、もう届けねい
な。

庄作 何だつつか。

關 亞麻の反別よ。

庄作 まだ極めてねい。

さうかい。ふうむ。おめいとこ地面ひ

る過ぎて、ちよつくら極められねいべな。
來年だら、亞麻、五町歩もつくるかい、は、
は、は……

人びと、聲を合せて笑ふ。

關 春勿々、届けねいばな——獎勵方針變
つたの、知つてゐるべ——會社肥料、借りら
れなくなるど、おらはうの實行組合。えい
だか。

庄作 うん。(踏切を越えて、橋のはうへへ去る)

河邊 (三宅にしたら、ここで待つてれつて。
支局長さ相談して、あんた行くもんだら、
自動車で拾つてくから。

三宅 ちえつ、莫迦にしてやがら。

河邊 (店の人びとに) ありがたう。(駆け去る)

三宅 (氣を配らして、店へはひつて來る) 記事とらし
て貰ひます。

關 (庄作を見送つて世話をやけて、仕方ない。
——寒いなあ。一年ぢゆうの、錢つこ吐き
出したら、腹の底、冷えて來たもんだつ
て。

秀松 えいさ、あんたは。——もう、は、あ
んととくれあだべ、さき一昨年の自作農
創定から持ちこたへてるの。

關 そらあ、ま、ほかのやつらとは譯ちが
ふさ。ゆうべもな……(向ひの木工場を暗示して)
とめて貰つたべ。雪でな。——したら、大
つきい檀那も言つてあつたつけ、關とこが
うまく行くうちは、地主の賣り逃げだなん
て言はせねいつてな。

まつえ (三宅に何か訊かれて) 言はないつていいへば、もう言はないよ。あんた 鹿の手つきをしてこれだら言ふけんとな、は、は、は……

三宅 腐らせるなよ。
まつえ あんた、若けい女さ訊くときやな、齡は？ なん言てふもんでないよ。あんた、齡 幾つて、やさしく訊くもんだよ。

往來に、蒲葦のバスが來て停つたけはひ。

關 來た、來た。——ちよつくら待つてくれや。

女車壁の聲——荷物多いば、つぎにして下さあへ。

關 (風呂敷づつみを、片手にあけて見せて) これだ。……(店ものに挨拶して、駈け去る)

いし 毎度ありがたう。

バス、しきりにエンデンの音をさせて、雪のなかを行きなづむけはひ。——速さがる。

いし 二三年まへだら、箱糶までとまつたけどな。

まつえ (三宅に) さう言へばな、わし、せん、製糖會社のトラクタア農場さ居たつたことあったよ。あんた、新聞の人だら知つてるべ

——はれ、足立キミちゃんの事件あつたの。

三宅 ふうむ——ぢや、農場を小作地に分けた時分だね。

まつえ さう。あん時、わしにもの訊いた人

に、あんた、とつても似てゐるよ。

三宅 常談いふなよ。
秀松 (働ながら) そいつぐれぬ、臀おちつか

ねいやつ、あるもんでねいださ。市場さ、輸出向きの豈の選り分けに出てみたり、ビート農場さ行つてみたり、今度なんだ、また……

まつえ よしなさい、新聞さ書かれるんでないの。
いし そのほう、えいつて——ここさ來たつても、何ひとつするでねいし……

まつえ どうしたべ、あん時のトラクタア。

三宅 何んでもね、市と農林學校へ賣りつけたとき。志村つて、會社のやり手がね。學校のはうは、試験島で使ふんだらうが、何んにするのかねえ、いつたい、市ぢやあ……

堤防を越えて——河原で砂利を掘つてゐた村の貧農・神保八十八が、スコップを片手にやつて來る。腰であるデングン長靴を穿いた輕装。

八十八 どつつらもうに、雪、降りやがつたもんだな。(堤防をとび下りて、店さきへ來る)——すまねいども、また、當らしてけれな。

秀松 (苦がいて) またかい。しめいに、見つかると。

八十八 ふう、寒い。(ストーツに着る)

まつえ どうだね、景氣は。

八十八 けふだら、見れ、この足支度。飴ゴムの下さ、こつたらに赤毛布まきつけたもんだ。こんでも、水さ浸れば——何んだ、こりや。(ストーツの上の鍋の蓋をとつて見る)

まつえ 意地汚なしするんでないよう、天狗さ

ん。

八十八 鰯の三瓶汁か。(軍手をぬがうとして) ひつぱつてけれ。——(まつえ、股がせる) おつとと、裂けるんでねいか、いたましい。

いし ぼろぼろの軍手だねえ。飯場から下げて貰へばえいに。

まつえ どうだべ、さる、蟹焼いたみていな、まつ赤な手えして——(觸つてみる) おう、冷っこい。

八十八 えいか、雪掘るべ。けふだら、下あ、かんかに凍つてゐるんでねいか。やつさもつさツルハシで割つてくとな、やつとで砂利、面出すべ。スコップで砂利さ穴掘つて、こんだ、穴さ下りて、まはり掘るべ。

しめいに腰の骨こはくなつて、上がらうとせば、どうだべ。臀のまはりさ、知らねい間に、氷はりついてな、なんも體うごかねいんでねいか。んで、かう調子つけてな、(身ぶりをして) 一つぶり臀ば振ると、ピチツと氷割れるだ。

いし まさかねえ。

八十八 せがれ風邪ひいたつて、暖めねいば死んでしまふべ。(まつえに) 姐つこ、おめい、こいつの介抱してけるか。

まつえ 足りねいんでねんだべか、この人だば、ふ、ふ、ふ。(三宅に) あんた、これ、新聞さ書かねばだめだよ。

八十八 あ、こらあ、いけねい。——船津つあん、すまねいども、煙草一本——ねいか

い？

秀松 ねいな——あいにく。

三宅 (出して) バットなら、ありますよ。

八十八 (うらあ、すみません。——(吸ひつけて)

あゝ、うめい。貰ひ煙草と他人の何んとか
ほど、味のえいもんねいちふからな。(落つ
ことす)

まつえ ほれえ、手えかじかんで、持たさらね
んでねいの——口ばつか達者でも。

八十八 (拾ひながら) おら、こいつのお蔭でな、

何んでも人より一日遅れるんだつて。救農
工事でもな、六日出りや、米二俵下げてよ
こすべ。ところが、おらあ、飯場から煙草
下げて貰ふもんでな、いつも一日よけい出
ねばなんねい。軍手どころかつて……

秀松、一仕事すんで、店さきの壁のうしろに坐
り込み、石油桶のきんたま火鉢をしながら、緩
面を繰つてゐる。

往來の向う側から、澤の炭焼・市橋達二が、メ
リケン袋をさけて、身がるに雪の上をとんで來
る。

市橋 こんちは。

秀松 いらつしやい。

市橋 失敬、買ひに來たんでねいんだつて、
おら。——あんたとこ、炭、置かねいか
ね。……(見まはして) ここたら、場所えいし
——賣れるべなあ、てつきり。

秀松 炭？

市橋 今もな、向ひの五十嵐木工場で、二十
俵、注文とつて來たんだともな——ここだ

ら、イタヤの座敷炭は、いらねいべども——
どだね、檜の十貫俵、一等品、四十錢で
卸すけんどなあ。

いし (ストーヴのそばから抜け出して) ばかに廉い
んでねいかい。

市橋 は、は。暮れにつき、大安賣だよ。

——その代り、現金だつて。

秀松 現金？ どの炭だ。

市橋 (袋から炭を出して) まあ、見本みて下さ
へ。——おら、澤のもんだけんどな、晝ご
ろ荷い持つて來つからな。——見るだき
や、ただだつて。

いし どれ。(うけとつて見る)
まつえ (三宅になぜつちふのかい。お祭りんと
き、天狗の面は被るから、天狗さんちふん
だよ。

市橋 玄人だな、をばさん、炭みるの。
いし なあしてえ？

市橋 つまんだ手つきで、もう分かるつて。
いし かなはねいねえ。口うまくつて、賣り
つけようかと思つてえ。——はじかねいか
ね、これ。

市橋 そらあ、ちつとは、はじくべき、檜だ
もんな。

いし 檜の一等品が、そつたにはじくか
ね？

人びと、どつと笑ふ。

市橋 こらあ、いけねい。——けんど、まあ、
その正直なとこ認めて貰ふべ、は、は、は。

今、市價、一圓三十錢するべ、この邊で
なら。

いし どうだね、あんた……(秀松をかへり見る)

秀松 (それには答へず) 澤のもんだつて、おめ
い？——炭焼だかね？

市橋 さうだつて。

秀松 澤だら——早川木炭部の持ち山でねい
か。

市橋 あゝ、それだら心配いらねい。木炭部
さ諒解ついてるんだから。

秀松 ふうむ。

市橋 俵數かぎつて、賣らせて貰ふんだつて
……心配ねいですよ、なあ、をばさん。

秀松 ま、見合はすべ。

いし 惜しいことは惜しいけんどなあ。

秀松 いらねいよ。

いし (炭を返す)

市橋 は、は。——まさか、あんた、無
斷で……

秀松 いらねいちふに！

市橋 さうかね——したら、荷い來たとき、
ま一度、寄るからな、考げいといつて下さへ
——お邪魔しましたあ。(去る)

いし 儲かるけんどなあ。

秀松 莫迦、大體、人相悪いいつて、あいつ。

八十八 (三宅に) おら、今でこそ、救農工事さな
んど出てえるけんどな、こんでも開墾のと
きからの古顔だつて。おらが出ねいば、祭
りも出來ねい。

いし（ストウへ寄つて）さうそ、わし、をかし
くつてねえ。この人だら、行列とまると、
すぐ面はおでこさ押し上げて、煙草吸ふん
でないの。

八十八 あんた、發句のこと、くはしいべ、新
聞の人だら。早川の檀那がな、短冊書えて
くれたんだとも——うめいのかね、こつた
らやつあ——え——と——面のけて——何ん
ちうたつたけな——哀を吸ふや——天狗さま
か。

三宅 天狗さま？

八十八 あ、んでない。——何んだつたけな。

堤防のはうから、おなじ数農工事に出てゐる、
澤の炭焼・能勢喜代治がやつて来る。

喜代治（店をのぞいて）ゐたな、野郎。——長け
いしよんべんだな。

八十八（ふり向いて）おどかすねい。

喜代治 野郎、ちよくちよく委くらますかと思
へば、こつたらうめい穴さへえりこんでけ
つかつたな。

八十八 まだ戻らねいべ、空ろ櫓？

喜代治 空ろ櫓もくそもあるかつて。——飯場
さんが、おめいに、ちよつくら用あるつて
よ。

八十八 ほんとかい？

喜代治 は、は……ついでに、おらも富ら
して貰ふべ。ごめんなせい。——（ストウ
のそばへ来る）

八十八 つくそう。」

喜代治 おら、もう、やけたつて——腰から下、
ばかんなつまつたど。（八十八の肩へ靠れか
かつて、ゆすぶりながら……）

暮れの晦日だ、
水んなか、冷つこいど。

親方、ふところあ
花さく五月か。

おいとこ、かやせ。
はら、も一つ、返やせ。

よう——とこ、しよつと。

まつえ は、は、は。

秀松 うるせいな——おらとこ、救農工事の
溜り場でねいからな。出てつて貰ふべ——
二人とも。

八十八（喜代治に見れ。——おめい、第一、船
津つあんの人、誰も識えてゐねいんだべ。
面厚いな。

秀松 しめいに、おらが、飯場から談判こか
れつからな。

喜代治（秀松に）どうも、すんません。——お
ら、澤の能勢ちふもんで……

八十八 行くべ。仕方ねい。——（二人、出て行か
うとする）

秀松 あんた、澤のもんかね。

喜代治 へい。

秀松 したら、ま、えいつて、騒がねいば。

——聞きたいことあるんだともな。（價から
煙草を出す）

八十八（みて）あれ、つくそう。——罰金だつ

て。（一本、ぬきとる）
秀松 澤で、木炭部さ譯話して、炭賣るんだ
つて？

喜代治、へえ——知らねいなあ——尤も、おら、
十日ばつか飯場さ泊りつ切りだもんな——
留守のまに、もやさねい窯の天井おつこつ
ても分からねいべけんど——そつたら筈ね
いべなあ。

秀松 ふうむ——したら、炭焼でな、額さ傷
あつて、右の眉毛、二つさ割れてる奴ある
べか？

喜代治 あゝ、市橋だべ。——澤でなら、あい
つと、泉とこの治郎ちふの、いつとう貰わ
りいんだつて。——ふうむ、つくそう、歸
えつたら、張りとはしてけるから。

秀松 治郎ちふと——龜太郎さんの息子か
い。

喜代治 あんた、知つてたかい、あのお父う——
はれ、小樽さ逃げて、阿魔つ子に小料理
屋やらしてるとか……

このあたりの風景のなかでは、ちよつと人の眼
を惹く酒に黒いに銀黒風の襟巻を垂らし
て、天幕のマスクをかけた雨言照子が、店さ
きへ現れる。そのあとから、質素な木綿の餘所
ゆきを角巻にくるんだ女中の過見しの。

照子 ごめんなさい。

秀松 いらつしやい。

照子（店の品々を見まはして）あら——（ふり向いて）

しのや、ここなの？

しのへえ。

照子 だめだわねえ、やつぱり繁華街まで行かなくつちや……

三宅 (立ち上つて) 場長さんの奥さんぢやないですか？

照子 あら、三宅さん、どうなすつたの、こんなところに……

三宅 奥さんこそ、どうしたんです。いつ、東京から……

照子 (マスカをはづしながら) 東京はね、だいぶ前だけど——父の家にゐたのよ、札幌の。

——今朝、歸つたばかりかし。

三宅 よく立ち往生しませんでしたね、狩勝峠の近所かなんかで……

照子 ほんと。——何んなの、あなた？

三宅 社でね、方々の市の、歳の市めぐりつて特輯をやつてるんですよ。歳末風景。

照子 あら、いやよ、あたしのことなんぞ書いちゃ……

三宅 は、は、は。トビツクだな、しかし。場長夫人が、お里の瀧本博士のところから、今時分とんで歸つて、戸まどひして、こんなところへ……

照子 うそよ——どのみち、菊丸デパートまで行くのよ、ねえ、しのや。

いし 奥さん、何か、ここでお間に合ふもんねいだべか。

照子 (見まはして) さうねえ。——あら、なあ

に、この伊勢海老は——粘土なのね——まあ、針金のひげを生やして——どうでせう、このおかめの面は。——しのや、おまへのうちでも、かういふもの飾るの？

しのへえ——奥さん、頭、氣いつけなさるねいば……

照子 あら。——(避けて、軒につるしたのを見上げ) まあ、この蛸の足つたら、棒みたいに凍つてるぢやないの。ほ、ほ、ほ……

(四方からそがれた視線を感じて) ごめんなさい、笑つたりして——まあねえ、農家ぢや、こんなものを、お正月のお肴にするのねえ。

(二重の意味で、眉をしかめる)

秀松 奥さん、繭玉、買ひなさらないかね。

——そらあ、こつたら矮つこい枝なら仕方ないべども——明日までに、大つきの作つて、お届けしますすべ。

照子 繭玉はね——内地の柳でない、うちぢや困るの。——さあねえ。——三宅さん、笑つてないで、何んか考へて頂戴よ。

三宅 (おらつてゐる)

照子 しのや、あなたに羽子板でも買つたげようか、ほ、ほ、ほ……

しのいいえ——お嬢さんの去年のいただきましたから……

照子 あのう——おまへの兄さんのところぢや、もうお正月の買ひ物したかしら？

しの 知らねいすけん……

照子 えうと——(店の人びとに) あんた方、夜

は、村へ歸るんでせう？

いしへえ——まさか、ここでは……

照子 逸見さんて家、遠いの、お宅から？——逸見——(しのに) 庄作つていつたかしら。

しのへえ。

いし (秀松に眼がはで) あんた。

秀松 いいえ——遠いつちふほどでも……

照子 だつたら (無造作に指さして) この繭玉、届けてあげて下さいな——お手数だけ……

……

秀松 (あいまいに) へえ。

しの 奥さん、そつたらこと……

照子 いいのよ——お幾ら？

いし 三十錢いただきますで……

照子 ぢや、これで——(友拂ふ) お刺りは、いいわ、お使ひ賃。——三宅さん、一度いらつしやらない？ 友の會の全國大會のお土産ばなしあるのよ。

三宅 あ、(「社會婦人」社の……) 伺ひます、そのうち。

まつえ (さつきから、癪つと眼をつけてゐたが) しのやん！

しのえ？ (眼が會つて) まあ、あんた。まつえ 違ふもんだねえ、わしなんだ、眼さはひらねいべなあ。

しの ごめんなさい、氣いつかなかつたんだもん。——あんた、すあぢやんやかねよさに會ふかい、ちか頃……

照子 嚮うから、暗切を越えて、バスが來たけはひ。

照子　しのや、ちやうど、バスが来たわ。儼約しませう。

秀松　いし　ありがたうございます。

照子　しの、去る。バス、遅がる音。

まつえ　（見送つて）ちえつ、えい振りこいて、何んだべ。こつたら羽子板でも買へる身分かつちふんだ。

八十八　（立ち上つて）さあて、行くべか。（店さきへ来て、照子の眞似をしながら）ま、どうでしよ、

このおかめは——ちゆわ。ず分のはう、なんぼか、おかめでねか。

人びと、どつと笑ふ。

八十八　さもなきや——（悪口を考へてゐたが）あ、んだつて。——新聞屋さん、猿田彦だつてえ。

三宅　何が？

八十八　貰を吸ふや、猿田彦。——おら、猿で思ひ出したもんな、は、は、は……

喜代治　また、冷つこいなあ——うけとる俵は、右から左か。やけた、もう、は、おら。

二人、堤防へのほつてゆく。

まつえ　おつ母あ、誰だべ、あれ、あの奥さん。いし　莫迦、しのちやのゐるとこ、知らなかつたかい。——農産實驗場の雨宮さんでねいか。

まつえ　え、實驗場？——あゝれ、ま、しまつたことしたよ。なあして、頼んでけれなかつたの、おつ母あ。

いし　わしよか——はれ、新聞社さんさ頼め

ばえいに……

まつえ　さうか、さうか。（三宅に）あんたね、わし、實驗場の女人夫さなりたくて、履歴出してあんだよ。——頼んでけれなさい、あんだ。

三宅　よし、よし。——（往來の向ひ側をみて）君ね、——まづいかな、あすこの珈琲——社のやつ來たら、あの自轉車屋の隣りね、あすこにゐるつて言つてくれないか。——

三宅　（店の人びとに）どうも、ありがたう。……（去る）

まつえ　えいよ。——その代り、きつとだよ。三宅　（店の人びとに）どうも、ありがたう。……（去る）

まつえ　えいよ。——その代り、きつとだよ。三宅　（店の人びとに）どうも、ありがたう。……（去る）

村の小學兒童の群れが、二人の教員に引率されて、橋から陸切りを越えて來る。一人の教員は、泣いてゐる女の子を、なだめすかしてゐる。群れを離れて、その教員と女の子と、男生のひとり、店さきへ來る。寺町玉樹と、駒井アヤ子と、泉英馬の三人である。

寺町　（もう一人の教員に）ちや、山村先生、お願ひします。……

寺町　ちよつと休ませてくれませんか——病人が出來ちやつて……

秀松　寺町先生でねいかい。

寺町　あゝ、あんたか。——ちやうど、よかつた。

いし　駒井さんのアヤ子ちゃんでねいかね。寺町　途中で、おながが痛く——なられちや

つてね……

アヤ子、しくしく泣いてゐる。

英馬　先生、ストローのそばさ連れてくべか。

寺町　さうさう。——泉、君は、みんなと一緒にに行つていい。

英馬　はい。——元氣出せや、な、アヤちゃん。（駆け去る）

寺町　（音が笑ひしながら）校長にね——僕がよけいなことを言つちまつてね。ほかの總代はみんな、この雪のなかを歩いて、滿洲移民を見送りにゆくの、駒井だけ、驛まで自動車で行つちや、意味をなさなくてね。

いし　よつぽど痛むのかね。

寺町　なあに……（天したことはないといふ表情）まつえ　（憎々しげに）誰の子だい、あんた——い

いし　まつえ。（腹む）まつえ　（構はず）わしの小せい頃だらな、あんたのおつ母さんなんど、冬でも……

いし　しばか言ふんでねいつて。（とめる）

秀松　（思ひ出して）あゝ、先生とこ、お父つあん、加減えくねいちふけんど、どうだね。

寺町　あゝ、ありがたう——どうも拙々しくなくつてねえ。それより、今度、道廳の方針變つてね——どつちか、やめなきやなら

いし　なあしてねえ？

寺町　師範出が餘るもんだからね、夫婦でや

つてゐるのは、まあ、片つぽ——遠慮しろ
ちふわけかな。

いし あゝれ、ねえ、をしどり先生が、片羽
もがれたら、どうなるべ。

秀松 困るでねいかなあ——ふうむ、いつと
う文句出にくいところから、やるちふんだ
な、なるほど。

アヤ子 (効果的に泣きながら) お醫者さ連れてつて、
先生——うちさ、電話かけてえ……

寺町 大丈夫、大丈夫。——暖まつてれば、
すぐ癒るよ。

アヤ子 ——やだ。病氣のときは、すぐお醫
者さ行けつて、母あちやん、言つたもん……

寺町 よくなるよ、もうぢき……

アヤ子 ——自動車さ乗つてかう……

寺町 し様がでないな——(口のなかで) 教はつて
來てるんだから。——すまないけどね、船
津さん、一圓ばかり……

秀松 う——そらあえいけど、電話かけた
はう早くねいかな……

寺町 この邊だと……

秀松 あゝ、向ひにもあるつて。
いし (眼がほ) あんた。

秀松 構はねいさ、こつたら時や……
寺町 うん、あれは、五十嵐農場の五十嵐さ
んの工場だつたね。

アヤ子 やだ、先生——五十嵐さんさ寄つた
ら、母あちやんに叱れるもん……

往來を横ぎつて木工場の職長・相良友吉が、年
をとつた職工・森田音造をつれて、店さへ(來
る。

相良 こんにちは。——いま、檀那がね……

秀松 あゝ、友さんかい。

相良 ……窓から見てなすつたんだが、早川
農場の——それ——何んの娘さんでねいか
い。

秀松 さうだよ。

相良 お困りのやうだから、連れて來いつ
て、言ひなさるんだが……

秀松 そらあ、どうも……

いし 檀那がかね?

相良 う——けふは、若けい檀那も來てられ
るけんどな……

寺町 あゝ、お手數かけて、すみません——
駒井、先生があとでよく話してな、お母あ
さんに叱らないで貰ふから——いいだら
う、行かう。

アヤ子 やだ……やだ……
いし そうれ、わし、おんぶしてつて上げる
べ。(音を向ける)

相良 は、は、……それがいい。
いし (アヤ子やつとおぶさる) でつかい赤ちやん
だ。——どつこいしよと。……

相良 (音造に) ちやあ、音——いけな、けふ
叱られたつたな——森田君、數、分かつて
るな。

音造 へい。

相良、さきに立つて、いし、おぶはれたアヤ子、
寺町、往來を越えてゆく。

音造 (もつて來た紙きれをひらいて) えゝと——サ
シメの相良さんとこと——(相良を見送つて)
ふふん……ノコヤと、中丸が二軒に、ハン
ドルのわしとこか……輪かざりが三十の……

……松の切り枝が十本——牛蒡注連は……

秀松 (かけならべた品をさして) この邊かね。
音造 まつと細つこいんでえいべ。……

いし、往來を越えて、もどつて來る。

いし ず分の子だつても、愛んこくねいべな
あ、あれなら。……(まっえに) わる口いふだ
ら、蔭で言へつて。

まつえ ふん、メツケ地主の子供なんだ……

いし (音造に) 音さん、何してただね、あ
んととこ、みんなして、座敷さ上がり込ん
で?

音造 決算報告だつて——檀那とわしらの共
同経営だもん、新しいべ、は、は、は。

秀松 (長い棒でおろしながら) こつたらとこ、え
いんでねか、玉飾り——どうだね、
この半期のぐあひは?

音造 わかんねいもんだな——世間しらずの
若けい檀那が何處にと思つてあつたども——

——どうか、かうか、やつてくにえいらしい
んでねいか。——ほれ、北見の山林さ、三
菱の手え伸びたときやな、あつたら廉い製
材できたらちうて、檀那や友衆さん、眼
え廻してたつてがなあ——もう、は、歸で

ねい、(頭へ手をやって)ここだつて。

秀松 さうなるちふと、おめいだの、おらだのは、ちいつとこさ肥料足りねいな、は、は、は。

音造 ほかのとこさ利き過ぎたんだべか。(入びと笑ふ)

まつえ あゝ、さうそ。——をちさん、あんたとこの廉ちやんだら、オリンピッククさ出るちふんでねいの——新聞でなら。

いし あゝ、んだつけ。——なんぼか、えいなあ。

音造 (向ひ側を氣にしながら) えくもねいつて。

——ほれ、若けい檀那が、新らし好きだべ。んで、金出してけるちふんだどもな——勝てば返さねいでえいつてよ——何んでも三本のうち一本旗あげたらな。——おら、斷わるべかとも思つたんだども……

まつえ なあしてえ?

音造 よけい事でねいか。——メめて、なんぼだね?

秀松 (算盤を置く)

まつえ 發つまへに、歸つて來なさるべか、廉ちやん?

音造 そらあ——來るちうた。

まつえ したら、教へてけれな。

いし かなはねいねえ。

秀松 四圓——五十錢ちやうどに負けとくべ。

音造 さうかね。(笑拂ふ)

三宅 三宅鐵也が、往來の向うからひき返して來る。まだ來ないだらう、社のやつ?

まつえ 來ねいけんど……

三宅 しめた。ちやあね……

秀松 まつえ、これ、手傳つて持つてえけ。

まつえ えいよ。

いし ほう、お天氣かはるべさ、その返事なら……

この附近に、林檎酒を賣るバアを經營してあるロシア人フョードル・コヴァンコフが、店さきへ現れる。

コヴァンコフ ゴ免ナサイ。

いし いらつしやい。——(空をみながら) あれ、ほんとに曇つて來たんでねいか。

音造 また、雪だべかなあ。(まつえと二人買ひ物を運んでゆく)

三宅 あゝ、コヴァンコフさんぢやないですか。コヴァンコフ 違ヒマス、日本人デス。ワタシノ名、ノ・ブ・ゴ・ロ・オ。ワカリマシタカ。ハ、ハ、ハ……飾リモノ下サイ。コレト——コレト——アレト……

三宅 へえ、お店にもこんなもの飾るんですか?

コヴァンコフ 何トカ言ヒマスネ。國ニ來タラ、國ニシタガへ。少シ、違ヒマスカ? 國ナ

イ人、ヨソノ國ノ習慣、守リマス。ネ、コ

ノ通り。(いし) ソツチノ方ヨロシイ。

三宅 ぢや、クリスマスは、どうしたんで

す、大へんだつたさうぢやないですか、お店?

コヴァンコフ ヨク知ツテキマスネ。誰デスカ、アナタ?——學生サン、林檎酒ノンデ酔ッバラヒマシタ。スキイデ、クリスマス・トリ倒シタリ、大サワギデシタ。

往來の一方が、騒がしくなる。二三人、その方へ走つてゆくものがある。

秀松 何だべ——(見て) えれい人だかりだな。いし (見て) あれい、雪除けの車でねいか、變つた形だねえ、ありや……

まつえ (往來の向うから駆けて來る。三宅に) あんた、ほうれ、トラクタアだよ、もとビート農場さあつた……

三宅 (見て) うむ、さうだ。——ふうむ。

まつえ 何、感心してんの、あんた。

三宅 なるほどね——市ぢや、何に使ふのかと思つたら——哀れだな、あゝなると……

まつえ あゝ、あれ、O・T25號ちふんだよ。わし、乗つけて貰つたことあるよ。ね、見てなさい、あのトラクタア、左さ曲がる癖

あるから——ほうれね——ほうれ——あれい、人逃げて、あ、は、は……おつ母、わし、ちよつくら見て來るよ。(駆けて出てゆく)

三宅 (コヴァンコフに) どうしました。

コヴァンコフ (無言——藥つと、往來の一方を見つめてゐる)

三宅 こりやいい、は、は、は。——コヴァンコフさんが、あいつを睨んでるのは、い